

*

極東の湿地帯は、才能を腐らせることで、振きこんでいる。この土地の習俗では、人は人の才能を腐らせてからしか、使おうとしない。

この悪癖は、たとえば、教育の場面においても、如実に露呈している。この土地の人々の通念によれば、①教えるけれども、わからない。つまり、教えたことしか解らない。②よって、勉強は、辛く苦しい修業である。③各人の努力の結果が、学力(の差)となってあらわになる。④学力の差は、人材としての優劣をあらわす。だから、優秀な人材をあつめるには、選抜試験が必要だ——。

教師は①→④、企業であれば②の逆に、発想すると11のうちがいはあるものの、教師も、企業も、また親たちも、この通念にこりかたまっている点で、変りはない。こうした発想が、実際どのような帰結をうみだすか、いまさら言うまでもないだろう。「受験地獄」を解消しようとかいって、113113やってみても、この前提にたつ限り、徒勞に帰すことは、あきらかである。(大体、その手の議論は、どこがどう悪いからどう変えようというのか、まったくあいまいかつポンコツである。いちばん悪いのは、そういう議論をやらかす手前の頭かもしれないのに。) として、この①～④の前提は、ひとつのこりか間違っている。

ところで、こうした変てこりんな教育メカニズムのしこりのようなある学校が、できからちやうど100年間もちこたえたというので、その教師らが喜んで、金をあつめ回ったりするらしい。あま

橋爪大三郎

(HASHIZUME DAISABURO)

CN50 8 pages ¥20.-

5-9-11, Zaimokuza, Kamakura, 248 JAPAN 0467-22-1030 横浜 51782

りばかばかしいので、口もあんぐり、怒る気すら失せるような話だが、生きじめな学生諸君は、こいはいくらなんでもひどいんじゃないか、というので、どうにかこいをやめさせようと頑張っている。曰く、"犯罪者ばかり卒業させてきた学校は、けしからん。" "そんな学校が100年目だからとよるこいののは、犯罪者だ。" "こいを黙って抱えておく奴らは、犯罪者だ。" 間違っているとは言うまいが、この論法では、自分たち(のある部分)以外はみな犯罪者だ、と告げぬはならない。その支は、どうするの? ゆたしは、自分の行為と自分の思想以外のことに責任をもてないため、自分がどんな種類の犯罪者であるかないかを、気にかけないよう。犯罪者や刑に主義者は、いたるところにウヨウヨしているのだから、自分の足をふんぎっている奴らともかく、そんなのをいちいち告発していった日には、あつというまた人生を棒にふるしてしまう。犯罪の撲滅をめざすのなら、「根こぎ」やる以外に、手はないだろう。(そういうことのために一生を度う、という言い方なら、まだ話はわかる。)

向が犯罪で誰が犯罪者なのかをはっきりさせる問題は、本当は、もっときちんと論じた方がよいので、こい以上こいこいこいこいことは、あまい。しかし、この件とは別に、考えてみたいことがある。100年目だと113で騒いだりする教師連の発想は、どこがどうイカれているのか? 113ばかおかしいのは、教師らが(あるいは、学生も)、自分のいるのはとんでもないか×学校だということに、ちっとも気づいていないことである。だいたい、この学校は、こいこいこい何人の何人かでもいい、誇るに足る創造的な知性をおくりだしたことがあるとでも、いうのだろうか? —— 々々々原因は、あまりにもはっきりしている。先の②～④の帰結として、この学校は、もっともよく耐えた者があつまることなのである、こいが天性に由来するのだから、こいともなにか下心あつたことかは、間ぬな11として、として、先の④の系として告げることだが、教える(ないし、教わる)ことがなくなつてしまえば、もう何もすることがなくなつてしまふのだ、こいで免許皆伝、一巻のおわり、という伝統芸能ならい

ざしらす、本当に肝腎な勝負どころは、そこから先にはかなひはあ
るのに。

**

前だけをみてひたすら真直ぐに突進してきた者が、ふと背後を振り
かえるとき、そこに深淵のようにはげな懸隔が口をあけていたのに
気づく、としよう。本当は、どこでも前へ進む場合にしか、話をは
じまらなひはあなのだが、日本の近代は、その手前でウロウロする
という類いのドラマしか、みせてくれない。最良の郎類の知性でも、
この懸隔との格闘に足をとられるあまり、前進のための推力をあら
かた意消してしまふ破目になる。大抵の場合、もっと下らぬことにな
る。この懸隔に喰喰おうというふとかけらのよこしま心から、人
は、いくらでも通俗と栄達の坂を転がりあちていくことができるの
だ。その点では、三文小説を書きちらそうと、大学あたりで教師職
業に精を出そうと、見かけ以外に別段何ほどのちがひもあるはずが
ない。己の才能をどこかで誇れるようなら、学問などしていても
仕方がない、と思うのだが。海の内側の噂なしに明けくらす
毎日なんぞは、もういい加減にしたらどうなんだ。

前号では、少年少女音楽隊のランキンクをのせたりしたので、そ
の噂をわたしが気に入っていろいろ、と考えた人もいろいろあるようだ。
別に、そういうことはない。リストの下の方から順に首を括っても
らうとも、わたしはいっこうにかまゆない。本当に気に入っている
のは、勿論、ほかのところである。しかし、自分の商売領域でこう
いうことを考えるなら、面白半分ではすまない。血をみおにすむこ
とではないので、刺さる気でもない限りは、やらなひこととしよ
う。わたしが、無類の読書好きの外見をもち、とすれば、それは、
無類の殺戮嗜癖のせいかもしれない。

「論理の本態について」は、はじめると4回の連載で簡単にあし
まいにするつもりであつたが、関連したものを読み漁っているうち
に、ずるずると深みに嵌まりこみ、11つのまにか、結構な大仕事に
膨れあがってしまいつつあるらしい。もともと、わたしには準備の
乏しい領域なので、初歩的な誤謬に陥るまいとするだけでも、容易
でない。しかし、いろいろ当たりをつけていくにつれ、この作業は、
"記号空間論"にとって、そしてまたおそらく、あらゆる社会理論
の試みにとって、欠かすことができないはずのものであつた、とい
う感触を、ますます深めていく。たとえば、数学における形式主義
の立場を大胆に打ちだした D. Hilbert の仕事（『後何学の基礎』
1899）の輪郭にふれてみたりすると、これまでは、わたしのほかで、
歯痒くも別々にしかたどられてこなかった、構造主義（R. Jakobson
→ C. Lévi-Strauss）、変形-生成文法理論（N. Chomsky）、論理実
証主義（L. Wittgenstein）、……といった、20世紀の代表的な本派
に共通する源に、はしなくもひと足を踏み入れたような、ざっとす
るほどの緊張と興奮とを、覚えてしまう。そして、この「論理の本
態について」という作業のしめくりをつけるには、どうしても、
一方で、後期 Wittgenstein（特に、その『数学研究』）に、もう一方で、
心身論（とりわけ、数概念の身体論的な根拠）に、考察を反ばして
いくほかはなひださう、と予想している。とはいうものの、それに
至るまでの作業も、迂遠なものがあり、いまのわたしたちの論点は、
稿を改める方がよいのかもしれない。はたしどこまで有効に議論
をはこんでいけるのか、わたしにも皆目予想できない、が、ともか
くやれるだけはやってみよう。

"記号空間論"の構想のなかで、手をつけなひなテーマがまだ
沢山あつて、気に入っているが、仕方がない。11つか、F. Klein の『
エルランゲン・アプログラム』(1872)のようなエレガントなパンフレ
ット1冊として、わたしの『記号空間論』を印刷することができれ
ば、幸せである。

論理の本態について (2)

(序前)

なぜ、アキレスは、亀を掴まえることができなかったのか？ —
— いうまでもなく、その失敗の原因は、アキレスが、亀の本性と手口とを見抜けなかったところに、ある。亀の本性とは、愚考の愚かさであり、論理の公理を受容しない野放図さである。また、亀の手口とは、自分の本性を隠したまう、部分的にアキレスの論理世界に馴致してみせ、相手の破綻を誘う思わせぶりであった。この亀の思考を論理的な秩序によって通路づけようとして、アキレスがいくら公準(axiom)を追加しようとも、無駄である。なぜなら、いま新たに追加された公準と、且指す結論とをつなぐはずの推論規則を、亀の思考は決して受容しないのであるから。非論理を論理によってとり囲むことは、できない。(実際は、その逆に、むしろ論理を非論理がとり囲んでいるのだ。)

Carrollの寓話の帰結が示すとおり、わけわけも、この亀を、アキレスの仕方では決してとり押えることができないことを、確認した。しかし、わけわけには、この亀をトリックスター気取りのまゝ野放しにしておく理由は、毛頭ない。そこで、わけわけは、アキレスとはまた別のやり方を、してみよう。わけわけは、いきなり亀の首根っこを掴んで、こう、言うべきである——“お前はしたり顔で絡んでいるが、奥のところ、正体のない影にすぎない。論理につきまとう一抔の不安のようなものが、ひとり歩きしているだけではないか。”

この言明を、もう少々わかりやすく、散文的に書き直せば：

① 思考の規則を疑う思考は、そもそも、それ自体いかなる思考としても存立しえない。もし、思考が亀のようにのろまで、どんな命題からも決して別の命題に移りすすむことが(でき)ないのだ。としたら、それはもはや、思考ではない。かかる亀が(秩序だった)思

考を行なうことは、もはや不可能にちがいない。

② にもかゝらず、その亀が、ユークリッドの体系のような論理的秩序の舊道をよく心得ており、アキレスを論難したりできるとすれば、その亀は、己れを単によく理解してはいないだけの論理的な亀であるか、それとも、己れの同一性を喪ってしまっただけの分裂的な亀であるか、それとも、悪意に満ちた欺瞞的な亀であるか、いずれかである。

もし、わけわけがこのように言うならば、亀はチェシャ猫のようにニヤニヤ笑うだけで何も応答しないかもしれないし、あるいはまた、たとえぼつぎのように、逆襲を試みるかもしれない——“なるほど、わたしは、論理的思考にとり憑いた蔭にはかならないかもしれませんが、たしかにわたしは無力です。しかし、人は、いくら論理を振りかざしたところで、わたしを追いはらうことも、退治することも、できないのです。わたしを刺し殺した途端に命を失っていきるのは、あなたの方かもしれないよ。” いずれにせよ、亀は、このありとを寝技にもちこんで傷みわけにするぐらいのことは、わけなくできるだろう。なぜなら、Carrollのなかに1匹の亀が住みついていたように、いかなる論理的思索家の頭脳のなかにも、必ずやどこかに、この亀が巣喰っているはずなのだから。

CarrollとDodgsonは、終生をOxfordの学寮にといこもってすごした、数学者であった。後世、彼が童話(?)作家としてえることになった並ぶもののない名声とくらべるなら、彼の数学者としての評価は、はなはだ芳しからぬものである。ありていに言って、彼は2流から3流どころのオメ数学者であり、名前通りの「ドジ」な奴であったようだ。1832年、堅苦しい田舎牧師の家に生れ、吃りに悩んだ自閉症気味の少年は、長いとは、数学よりもどちらかといふはパズルやカメラ、心霊術に熱をあげる、偏屈で孤獨な男になった。学寮長の娘Alice Liddellをはじめ、年端もいかぬ少女たちだけに異様な執着を示すなど、常識人の基準からすれば、Dodgsonは

完全な「変質者」扱いをうけても、面の下意識もなかったろう。

しかし、Dodgson がタメ数学者でありざるをえなかったのは、彼の感性が、数学をやるにしたら、あまりに敏感すぎたせいである、と見れば見られぬこともない。19世紀当時に至るまで200年余の数学は、解析論を中心に展開しつつあったが、その方法論的基礎は、大体においてはなほだ脆弱かつ好い加減なものだったのであって、たとえば、「(実)無限小 actual infinitesimal」なる概念が、大いに慥をきかせていた。Dodgson は、どうやら、この無限小——いかなる数よりも小さく、ゼロより大なる、ある種の数——をどうしても理解することができず、そのため、ついに解析学が解ったためしかなかったものらしい（それがあらぬか、彼は一生講師のまゝでそれ以上早進しなかった）。これは、無理もなかったろう、当代の大数学者たる C.F. Gauss にしてからな、無限量を数学において用いるべきではないと、真剣に考えていた、というのだから。しかも、司教 Berkeley あたりを以てはじめとする、多くの数学者にとって、この実無限小の概念は、合理主義思想の非合理性を非難攻撃する場合にはいつでも恰好の攻撃目標となっていたから、Dodgson もおびぶん悩んだにちがいない。もちろん、無限の取扱いは、Cauchy、さらには、とりわけ Cantor の仕事によって、はるかに改善され、今日われわれの知るような、いっそう整合的かつ厳密な形に、定式化し直されている。Dodgson は、自力でそうした工夫をするだけの才覚もなかったので、数学者としての自己のアイデンティティをすっかり脅かされてしまい、ノンセンスの淵にさまよっていられたのはなかった。それは、彼の大きな不幸だったかもしれないが、われわれにとっては、炭坑のなかの一羽のカナリヤのように、かけがえのない予兆であった、と言えるだろう。Dodgson は、数学者として落ちこぼれてしまったおかげで、ある意味で、同時代を生きるかに先人ごしてしまっただけかもしれないのだ。彼の抱いた、論理的秩序信奉者アキレスの困惑は、のちに、現実に、20世紀の数学をみまわっている困惑でもある。

われわれが今日知るような現代数学の骨組みは、20世紀初頭にようやくその全体像をあらわすに至ったものである。集合論の出現によって、はじめに、全数学領域が、ひとつの体系として、一貫した論理的な秩序のうちにあることか、次第に確信されるようになった。ところが、周知のように、集合論は、その当初から、重たいいくつかのパラドクスを内包していたことが、しられた。その後、このパラドクスを巧みに回避するように、集合論の公理系を適切に設定することに、数多くの学者の努力が傾注されたが、いままも、完全に成功をおさめた試みがあればと言えないのが、現状である。のみならず、数学をいかに基礎づけるかを考える、数学基礎論の分野で、いくつかの見解の相違が生じ、互いに他を克服できないまま、相反する立場として、対立を続けている。

これは、いったい、どういうことなのか？ あらゆる科学を基礎づける、もっとも信頼するに足るとみなされているのはかの数学は、それ自身、はなはだ不完全な方法論的基礎づけしか、えていなかったのではあるのか？ 経験的な世界の制約からもっとも遠い、数学でさえも、究極しようのない体系であるしかないとするれば、はたして、われわれは、方法的に十全な知識——科学——が成立する、などと言えるのではあるのか？

この、数学という、最も純粹、最も抽象的、完全に形式的な分野で、目下生じている方法論上の難点を、われわれは、以下、なるべく詳しく考察し、それに関連する諸問題について、然るべき見通しをえたいのであるが、順序としては、数学基礎論の内容に立ちいる前に、現代に至るまでの数学的思考の展開とその方法的な諸特質について、必要な限りの目配りをしておいた方が、よいだろうと思われる。

(以下次号。文献類は、連載定稿時に、まとめてかかげることにします。)